



おいちよう

令和2年 8月18日

発行 鶴瀬小学校No.6

049-251-0144・0149

文責：校長 松波徳美

学校教育目標 **かしこく《学ぶ》 やさしく《和す》 たくましく《鍛える》**

鶴っ子のめあて

にこにこ

きびきび

ぴかぴか



「 二学期始業式・学ぶことの大切さ 」

— 福沢諭吉 『学問のすゝめ』より —

新型コロナウイルス感染症による休校に伴い、二学期が8月18日からの開始になりました。例年より短い夏休みでしたが、子どもたち一人一人は、きっと何か成長していることと思います。先行き不透明な時代の中で、子どもたちが、自らどのように何を学んでいくかが重要な鍵となっていきます。そこで、新しい社会をどのように創り、その中で人はいかに生きるべきかを論じた明治時代の啓発書としての『学問のすゝめ』をひもといてみました。学問の大切さをベースとし、「実学」の重要性を説き、実学により自己の能力を点検し、生き方を柔軟に組み替えていくことをすすめています。

諭吉は、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と語り、人の価値は生まれながらのものではなく、学問を修得した度合いで決まると説きました。「自己の能力をつねに点検し、生き方を柔軟に組み替えよ」「自分が使える自由は、自分の負える責任に比例する」「自分を正當に認めてもらうためには、言葉を選ぶ訓練をせよ、明るい表情で話をせよ」等、現代に十分通じる方法を提案しています。

実学を身につければ、変転する世界にも自由自在に対応できると諭吉は考えていました。仕事でも人生でも、最初に立てた計画は、しばしば現実の思わぬ展開に裏切られる。予測と異なる方向に進み、当初の目標を大幅に変更せざるを得ない事態も生じる。ここで大切なことは、「棚卸し」すなわち点検のし直しであると言っています。自分自身の能力の過不足を正確に把握し、生き方の更新をするようにすすめています。二学期の始業式に当たり、学ぶことの原点に立ち返り、教育活動に取り組んで行かなければならないことを再確認しました。今学期もよろしく願います。

参考：『座右の古典』鎌田浩毅著 ちくま文庫

「諭吉は、学問を身に付け、さらにコミュニケーション技術を身に付けた人間が、日本のために献身的に働くことを期待していた。彼は旧体制にしがみついた人々を、至る所で批判しながら、今後のあるべき姿を明確に示した。諭吉自身がこうした生き方を見事に実行したのであるが、その原点は本書にすべて込められているのである。」